

特別連載 アジ研の50年と途上国研究

第4回 アジ研のアフリカ研究創成期

よし 吉	だ 田	まさ 昌	お 夫
はら 原	ぐち 口	たけ 武	ひこ 彦
はやし 林		こう 晃	じ 史
しま 島	だ 田	しゅう 周	へい 平

はしがき

本稿は、かつてアジア経済研究所（アジ研）に在籍したアフリカ研究者4名へのインタビューの記録である。1960年代初めからアジ研でアフリカ研究に関わった吉田昌夫（元日本福祉大学大学院教授）、原口武彦（元新潟国際情報大学教授）、林晃史（元敬愛大学教授）の三氏と、ほぼ10年遅れで入所された島田周平氏（京都大学大学院教授）に、創成期～1990年代のアジ研アフリカ研究を振り返ってお話いただいた。アジ研在職中、吉田氏はタンザニアなどの東アフリカ諸国、原口氏はコート・ジボワールを中心とした西アフリカ仏語圏諸国、林氏は南アフリカ共和国を中心とする南部アフリカ諸国、島田氏は西アフリカの大国ナイジェリアを担当し、研究活動に従事されている。インタビューは2009年9月7日にJICA研究所で行われ、武内進一が司会を務めた。

1960年代は日本におけるアフリカ研究の創成期でもあるが、そのなかで若き研究者たちが何を思い、何に悩んだのか。アフリカ滞在で獲得した問題意識をどのような形で研究へと結実させたのか。1980年代に導入された「アフリカ総合研究事業」によって何が変わったのか。アジ研でのアフリカ研究をとりまとめ、大学へと仕事の間を移すなかで、どのようにアジ研の弱み、強みを感じたか。こうした点をざっくばらんに語っていただいた。アフリカ関係の図書整備に尽力された中村弘光氏（のち八千代国際〔現秀明〕大学教授。故人）のお仕事など、時間の関係で十分に取り上げられなかった話題もあるが、1960～1990年代のアジ研におけるアフリカ研究の大きな流れはお話いただけたかと思う。

インタビューの整理・監修は、武内進一、津田みわ、福西隆弘が行った。またインタビューは、監修者のほか、佐藤章（アジ研地域研究センター）、牧野久美子（同）のオブザーバー参加を得て実施された。なお、巻末にアジ研のアフリカ研究活動に関する年表を掲載した。

（JICA 研究所・武内進一）

（アジア経済研究所新領域研究センター・津田みわ）

（アジア経済研究所地域研究センター・福西隆弘）

## I 創成期のアジ研アフリカ研究

——今日は、アジ研創設時からアフリカ研究に従事されてきた吉田さん、原口さん、林さんと、それからほぼ10年後にアジ研でアフリカ研究を開始された島田さんにおいでいただきました。アジ研創成期のアフリカ地域研究のあり方や、当時の研究所の様子を中心にお伺いし、それを通じて今日のアジ研の姿を反省的に捉え、将来を考える糧にしたいと思います。

まず創成期の1960年代についてのお話からお伺います。吉田さん、原口さん、林さんのお三方から、1960年代のアジ研ではどのような仕組みでアフリカ研究が進められたのか、そのなかでご自身がどのように過ごされたのかということから、お話しいただけますでしょうか。

**吉田** 私が入所した1961年ごろのことを話しますと、まずアジ研という機関の位置付けが当時はいろいろ問題になっていました。ひとつは、岸信介元総理大臣が創設にかかわったこともあって、満鉄調査部の再来だというイメージで、日本の学界でも、あるいは財界でも、語られることが多かったんですね。満鉄が、結局日本の中国侵略の先兵になったこともあって、アジ研がまたアジアへの進出のツールになるんじゃないかといわれていました。逆にそれが、入所した人たちの意識を縛っていたといったらいさぎですが、そのことを常に考えさせられたということがあります。

私が入所してすぐ、初代所長の東畑精一先生がいわれたことで覚えているのは、日本は戦争に突入するところで、アジアに対する「熱情」ばかり先走って、「光」を当ててこなかった。だから、アジ研の場合は、熱ではなくて光を当



左から武内進一，林晃史氏，吉田昌夫氏，原口武彦氏，島田周平氏  
(2009年9月7日 JICA 研究所にて)

てることに基盤を置くべきだと。ようするに、「もっと冷静にみろ」ということだと思うのですけれどね。そういうことを入ったときすぐいわれました。だから、満鉄調査部が「熱」であれば、アジ研は「光」であるというような意識で研究をはじめたわけです。

当時はまだ若手の研究員が育っていないということで、外部委員が主力を占めていました。つまり、財界や学界を中心に、現業をもっている人たちを委員として集めて、研究をはじめていた。だから、私が入ったときも、共同通信の宍戸寛さんが主査で、「アフリカのナショナリズムの発展」という研究会がはじまっていたのですね。それと同時に、学界からは文化人類学者の泉靖一さんが「ニグロ・アフリカの伝統的社会構造」というのをはじめていて、こっちのほうは委託研究でした。「アフリカのナショナリズムの発展」のほうは、外部委員の方々にアジ研に来ていただいて、研究会を2カ月に1回とかの頻度で開催したわけです。私が入所したときは、そういう人たちのお世話役だったのですね。ですから、お茶くみとか、議事録を取るとか、そういうことをやっていました。ただ、当時としてはアフリカのことをよく知っている方たちが委員になっておられたので、話を聞くのも大変おもしろかったし、いろいろな知識をいただきました。

その後、1963年ぐらいから、アジ研設立後に職員として入ってきた人が主体となって研究会をやるということになってきました。そのころに、日本開発銀行から出向でこられた藤田弘二さんが課長のような形になって、「アフリカ経済の諸問題」という研究会がはじまったわけです。

私は入ってから2年目ぐらいにウガンダに派遣されることになりましたが、その前に細見眞也さん（のち北海学園大学。故人）と星昭さん（のち信州大学など。故人）が派遣されています。当時、一応の地域分けはありましたが、どこに派遣されるかは流動的でした。アフリカのなかで研究者の地域分けをするということで、細見さんが最初にガーナの担当となりました。これは英語圏の西アフリカということでした。その後、星さんが南部アフリカの担当ということでしたので、私は最初から東アフリカをやれといわれていました。

私は将来にわたって東アフリカを研究したいと思ったのですが、なかなか赴任できませんでした。何とか行きたいと思って先方に手紙を出しても、返事が来ない。それで、ケニアの独立が1963年12月12日にあるから、それを「歴史に一度しかないことだから、東アフリカの研究者としてぜひみたい」といって、ようやく海外に出してもらい、その足でウガンダに行って、自分でマケレレ大学入学のための交渉をすることになりました。それがうまくいって、ウガンダのマケレレ大学への派遣ということになったのです。そういうふうには、今と比べればいい増加減なところがあって、それがよかったのではないかなと思います。

——原口さんはいかがでしたでしょうか。

原口 僕は林さんと同期で、一緒に入ってきた。僕らが入所したのは1962年4月。入所してみると、あらかじめ、僕の担当は韓国と決められていました。それで、いや困ったなど。なぜ困ったかということ、自分では左翼的だと思って

いるわけ。そうすると、吉田さんがおっしゃったように、「帝国主義の手先」であるというアジ研に入った場合に、自分の良心を売らないでやっていくには、韓国は無理じゃないかと思ったのです。それで、「私には、韓国は無理です」と上層部に直訴して、そのとき僕はフランス語ができるといっちゃったんですよ。そうしたら、「ベトナムをやれ」と。ところが、ベトナムは解放戦線が出てきた頃で、これはまた危ない、また良心を売っていくことになるんじゃないかと思っていたら、1962年の秋からアジ研で大騒動が起きました。

かたちの上では、職員の配属を含めた労働条件の改善を求める労使紛争でしたが、それは今から考えると、組織ができる最初の、産みの苦しみだった。まだ覚えているけれど、真夜中に大手町のビルで団交の席に人々が集まって、そのなかで人が泣いたりわめいたり、すごい狂乱状態になったわけです。そのなかで何が起きたかという、この機会にアジ研でやりたいことをもう一度いいなさいと、アジ研当局がいてくれたんです。それで僕は、えいやと思って、アフリカ。そういうふうにして、アフリカに入ったんですね。

でも、アフリカに何か強烈な印象があって入っていったわけじゃなくて、ただで飛行機に乗れるのだから、一番遠い所へ行けるのがよいと思って(笑)。で、北アフリカのアルジェリアを望んだら、1962年ですから、東畑精一所長が、アルジェリアはまだちょっと行くのは難しいだろうということで、チュニジアに赴任することに落ち着いたわけです。

そのときにもうひとつ僕にとって大きかったのは、研究部門の分化を目にしたことです。大

騒動と前後して、方法論的に開発経済学にのつとったグループとして長期成長調査室(のち経済成長調査部)が、そしてアンチアカデミズムの旗印のもとに動向分析室(のち動向分析部)が、調査研究部から分かれて立ち上げられたのです。そのとき、アフリカグループの面々はどうしたかという、アフリカだけがそういう他の部室に散らばらなかったのです。アフリカだけは、調査研究部のなかにそのままどまったんです。これは、その後のアフリカ総合研究事業立上げのときにも影響したかと思うのだけでも、いくつかの部に散らばらなかったことは、アジ研におけるアフリカ研究の特色ですね。

——林さんは同じ状況のなかにおられたのですが、どのようにご覧になっておられたのでしょうか。

**林** 私も原口さんと同じ1962年に入所したのですが、入ったら、もうビルマ担当と決まっていたんですね。たまたま、彼がいったように、大騒動が起きました。その理由のひとつは、前年くらいに労働組合ができたんですね。かなり組合が強かった。私はゴールドコーストのナショナルリズムの問題を大学の卒業論文で扱ったものですから、アフリカをやりたいというのでアジ研に入ったのですが、ビルマ担当になっていたのびっくりして、東畑精一所長に直訴して変えてもらったのです。それでも1年間ビルマについて勉強しましたし、ビルマ語も習いました。

そういうことでアフリカに移ったわけですが、さっき吉田さんがいわれたように、私たちが入ったときは、もう藤田弘二さんが課長として来ていて、彼を中心に研究会が組織されました。

当時はひとつしか研究会がないんですよ。彼は、方法論を示して研究会を組織することはないで、ようするに寄せ集めなんですよ。研究会のタイトルをみればわかるのですが、「〇〇の諸問題」とか、何も限定していないのです。何をやってもかまわないと。私も入所してから、何をやれと縛られたことは一度もありません。

アフリカ担当になって、ガーナを引き続いてやりたかったんですが、既に細見さんがガーナの担当なので、それ以外の所を選べということになりました。私自身はアフリカで白人が入った植民地に非常に関心があって、そうすると事実上、ローデシア、南アフリカ、ケニアの3国しかなかったんですよ。ローデシアは既に星さんが現地へ赴任されているので、南アフリカを選びました。テーマは、南アフリカをやるのだったらアパルトヘイトが当然重要だろうと。これは自分で決めて、研究をはじめました。

1966年に海外派遣の時期を迎え、当然、私は南アフリカに行くつもりでした。ケープタウン大学に申請をして、大学からは承諾の返事が来たのですが、南ア政府が許可を下ろさないのです。社会科学を勉強する者が南アフリカに入れば、アパルトヘイトのことを研究するだろうと。これは、南ア政府の一番嫌がることです。ローデシアは既に星さんが行っていましたし、1965年に「一方的独立宣言」が起こって、日本の大使館も引き揚げたんですよ。そういうことで、最終的に赴任先をケニアに決めました。

今までケニアの勉強をまったくしていないので、仕方なく赴任の時期を遅らせ、1年間ケニアの勉強をやってから海外派遣に行くことにしました。ケニアで当時一番問題になっていたのは土地改革でした。今までの共同体的な土地保

有が解体するなかで、土地の私的所有を認める、そういう大改革をやったのです。改革の意味がどういうところにあるのか、どういう手続きでやるのか、それをケニアで2年間調べました。この間、隣国のタンザニアでウジャマー社会主義<sup>(註1)</sup>がはじまりました。それを横目にみながらケニアの調査をまとめた後、この問題に取り組み、都合5年間くらい東アフリカの研究を続けました。

## II シンポジウム

### 「日本におけるアフリカ研究」

——次に、1970年2月号の『アジア経済』に掲載されたシンポジウム（「日本におけるアフリカ研究」）<sup>(註2)</sup>についてお伺いしたいと思います。このシンポジウムでは、どのようにアフリカ研究を進めるべきかという方法論について議論されています。原口さんによる問題提起では、霊長類学の今西錦司さん、マルクス主義の寺本光朗さん、さらにアジ研の星さんのアフリカ研究方法論が批判的に検討され、それに対して活発な議論が展開されています。1960年代初頭にアジ研に入られたみなさんがアフリカでの調査から帰国された後に、いわば自分の立ち位置を問うようなシンポジウムが行われたわけですが、そのあたりについて、シンポジウムを中心になって企画された原口さんからお話を伺えますか。

**原口** 僕は今日の会があるというから、久しぶりにこれを読み直してみたけど、やっぱり何かに取り憑かれていましたね、今から考えれば。取り憑かれていたというのは、やっぱり不安が

あったからでしょう。自分がこれからこういうところで、特に先達がいるわけじゃない状況のもとでやっていくことに対して。日本のアフリカ研究では、今西錦司みたいな人類学的方法と、もうひとつは南アのアバルトヘイト問題の野間寛二郎、「アジア・アフリカ研究の問題点」<sup>(註3)</sup>を発表された歴史家の上原専祿、さらに左へ来ると岡倉古志郎、寺本光朗ですね。こういうなかにおいて、どうやっていくかということに対して、やはり不安をもっていたのかな。

それと、われわれ1960年代初めにアジ研に入った、吉田さん、林さん、細見さん、僕が、初めて一緒にの時期に、東京で過ごすことになるのは、このときなんですよ。それまではそれぞれアフリカに赴任していて、吉田さんのことなんか、ほとんど知らなかったのです。この時期までは。だから、相互によく知らなかった者同士が、調査研究部のなかで相対的に「場末」のアフリカというところにおいて、これからどうやっていったらいいのかということ、みんな考えようというのが、恐らくこのシンポジウムの動機だったんだと思います。

シンポジウムで議論の素材となった「アフリカ研究の一視角」というのは、星さんが1968年に、セネガルのダカールで開催された第2回国際アフリカニスト会議で報告するための原稿として用意されたものでした。私はあえてこれを取り上げて、みんなで討論しようといういいだしっぺになりました。

**吉田** ちょっと説明しますと、藤田弘二さんはそのころもう辞めて、星さんがアフリカのまとめ役になったわけですね。そういうときに、このシンポジウムが企画されたんです。

**原口** そうそう。内容的には、『アジア経済』に掲載されているとおりの事態になったわけですが。作成のために、何日間もかけているのですよね。結果的には、特集号の「まえがき」にある星さんの言によると、でかいことをいっているわりに内容は無いが、しょうがないから載せるということになりました(笑)。

**林** シンポジウムが行われたとき、私はケニアから帰ってきたばかりだったのですが、どうしてこういうことをやったのか、意味がよくわかりませんでした。確かに星さんの「一視角」が批判されているのですが、よく内容を読み返してみると、批判になっていない。

たとえば、原口さんは、今西さんを批判して、「サルの子供と人間の子供」というようなことをいっていますが、それは批判じゃない。もし批判するのだったら、今西さんが書いた論文を取り上げて、彼が考えているように論証されているかどうか、論文で批判しなくてはいけないのですよ。

それから、原口さんは最後に3点に集約して提言を出されていますけれども、これはあくまで心構え論に留まっています。3点のうち、第1は、他者の研究にもう少し踏み込めということですが、これは無理な注文です。たとえば、僕らが人類学の成果についてほんとうに批判できるかどうかというと、難しい。第2に、もう少し易しい言葉で書け、日常感覚を重視しろということですが、これも社会科学の次元とは違う問題じゃないかと私は思うのです。第3に、相互に批判する。これは当然なのですが、具体的にわれわれが論文を書く場合、当時アジ研では研究会とか、また週に1回開催される調査研

究部の部内研究会<sup>(註4)</sup>とかで、必ず報告します。そこでみなさんから、批判を受けて、修正すべき点は修正して、論文を書いて出しているわけですね。こういうことは既にやっているわけです。

だから、このシンポジウムで何か新しく生まれてきたかという、私はあまり生まれてこなかったんじゃないか。ちょっときつい言い方ですけれども。

**原口** それは自己批判ですな。あなたはそこに参加していたんだから。

**吉田** 林さんは帰ってきたばかりだったということですが、私はアジ研を休職して、今の国際協力機構（JICA）の前身だった海外技術協力事業団（OTCA）の専門家としてタンザニアに専門家として赴任する直前だったんですよ。その直前には、農林省に勉強に行つてこいと当時の所長の小倉武一さんからいわれて、3カ月デスクまでもらって通っていたんです。それで、ちょっと戻ってきたら、何かこういうシンポジウムをやるからといって、準備もなしに参加したような話なんですよ。

だけど、なぜこうしたシンポジウムが行われることになったか、というのはよくわかります。みんながそれぞれアフリカに行つて帰つてきて、何かの成果を持ち帰つてきた。その成果というのが往々にして、あまりほかの人に批判されることなく、過ぎてしまうことが多いんだろうという感じはあったんですよ。だから、ここで自分を見直して、ほかの研究者との位置関係とか、あるいは自分の方法論とか、そういうものを固めていかないと、このまま事情通になるだけで

終わってしまうんじゃないか、そういう危機感があったんだと思う。

その危機感の的を射ていて、だから原口さんがみんなに少し突っ掛かって、いろいろいってくれたことは、心構え論と林さんはいったけれども、その後自分の研究を見直しながらか進めていくなかで、とてもプラスになったと思います。

——原口さんは振り返つてみて、何か加えることはありますか。

**原口** いや、特にないですね。あえて肯定的に言えば、ほかのことでもそうですけれど、僕は触媒的な人間なんですよ。だから、実際、自分のなかには何も無いんだけど、アジ研のアフリカ研究者たちが一堂に会して議論をやり、そこからばばばと音が出るという、その音が出たことが、このシンポジウムではある程度あったんじゃないかなと思っています。

### III 1970年代の研究成果

——シンポジウムの内容が『アジア経済』に掲載されたのは、1970年の2月です。1970年代は、1960年代初頭にアジ研に入ったみなさんが、重要な研究成果をどんどん生み出していく時期に当たります。島田さんはそういう時期にアジ研に入所されたわけですが、いかがお感じになったでしょうか。

**島田** 私も、このシンポジウムをずっと前に読んでいたのだけれど、そのときの印象はないのです。今度あらためてこれを送ってもらつて読んで、私が入ったときに先輩の方々が当時、自

分たちの研究のスタンスをどうするか、視点をどうするかという大きな悩みをもっていたのだということがよくわかりました。

私が入所したのは1971年ですけど、そのときにはすでに大野盛雄さんの『アジアの農村』<sup>(註5)</sup>という本が出ていて、アジ研というのがあって、そこでは海外に調査に行けるということは、もう既知であったわけです。学校の先生からも「おまえ、フィールド調査が好きなんだったら、こういう所があるから」といわれている。だから、私などは、アジ研はもうできあがっていると思って入ってきている。そして、その頃アジ研はちょうど研究所として自信をもちはじめた時期だったんですね。

私の同期の入所者のなかで大学院卒は一人しか入っていません。あと全部、学部卒でした。つまり、研究所は、今後の研究所を全体としてどうしようかということを考えはじめたときなのです。我々の先輩が、大学院を出てきた人は非常に堅くて、地域研究というか、アジ研の研究にあまり合わない。だから、学部卒で採用して研究所でトレーニングする自信をもっていたんですね。だから、我々は入ったら1年間、研修があったんですよ。それで有賀喜左右衛門全集を読むとか、サミュエルソンの経済学のテキストを読むとか。ちゃんと先生もついて1年間、研修をやりました。研修の最後には山梨県の旧奈良田村（現南巨摩郡早川町）に出かけ、フィールド調査もやったのです。

このシンポジウムの原口さんの意見をみると、今西さんら京都大学のやり方とか、寺本さんのやり方とか、いろいろなことに目配せしながら、アジ研の自分たちはどうあるべきかと問うているんですね。不安になっているというけれど、

私にいわせれば、ほんとうに不安な人ができない議論ですね。つまり、現地経験がすでにあって、ある自信をもっていたと思うんです。

それをものすごく感じたのは、私が入ってしばらくたって、赤羽裕さんの『低開発経済分析序説』<sup>(註6)</sup>が出版されたときです。私はあれが出てショックだったのだけれど、先輩諸氏の方々は、揺れていないわけです。私は理学部の学生だったのですが、学園紛争の時代で、マックス・ウェーバーとか大塚久雄は読んでいたわけです。理学部がストライキで授業をやっていなかったから、文学部とか法学部の話を自分で聞きに行きました。だから、ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』などの講義は文学部で聞いています。それで、赤羽理論が出てきたときに、私は現実のアフリカをまだ知らないから、「すごいな。アフリカってこんなによくわかるんだ」と思ったのですが、吉田さんに聞くと「うん。行っていない人は書けるんだよね」というような対応で（笑）。だから、この自信って何なんだろうと。

あともうひとつは、さっき林晃史さんが、京都大学のやり方は人類学的で、やり方の違いを批判しても、批判にならないとおっしゃったけれど、方法論の違いというのは非常に大きいと思うのです。まったくアフリカに行かないで、理論だけでやったときにみえる像は、非常にバーチャルでフィクショナルだけど、理論的には整合性がある。しかも日本の当時の社会科学の現状からはすんなりと入れるから、学生なんかにとっては取っつきやすい。それで惹かれるのだけれど、吉田さんにしても、他の人たちにしても、衝撃の受け方がまったく別なんですね。ですから私が研究所に入った1970年代初期に

はすでに、先輩の方たちはもうアフリカ研究者としての揺るぎない基盤ができあがっているという感じがしました。

**原口** 島田さんが今いったことをちょっと補足させてもらおうとね、この時期、アジ研には、第1期生の中岡三益さん（のち東京国際大学など）や林武さん（のち大東文化大学。故人）を中心としたグループがいるのですよ。この人たちは、滝川勉さん（のち筑波大学など。故人）を中心とした農村実証研究とはある意味で対立する存在でね。何をやったかという、アジ研に大塚史学に代表される日本のアカデミズムを入れてくるわけですよ。それにとりこまれるのが林晃史さんと宮治一雄さん（のち恵泉女子大学）、落ちこぼれたのが細見さんと僕。それで星さんは困った。アジ研のなかでアフリカグループに、大塚史学が攻めてくる。その攻めてくる一番の先兵が、赤羽さんだったんですよ。

——吉田さんが1975年に出版された土地保有制度に関する研究成果<sup>(註7)</sup>は、赤羽理論に対する研究上の真摯な対応だったと思います<sup>(註8)</sup>。この本は、吉田さんの業績のなかで重要な位置を占めますが、研究会を組織されたいきさつや問題意識をお話し願えますでしょうか。

**吉田** 赤羽さんの論文が出版される前、彼はアジ研の研究会委員だったんですよ。そのときに論文構想が出てきたわけですね。彼のアジ研での成果は、出版物としては所内資料でしか残っていないのですよ<sup>(註9)</sup>。ただ、あそこに出されていたのは、私にとってはすごい違和感があるなという感じでした。

なぜかという、やっぱりウガンダなどでみてきたことと、どうも違う。あまり大塚史学になじみがなかったこともあるかもしれないけれども、すごく事実と違うという感じがしたんですね。それは、ひとつは部族というもののとらえ方が、何か全然感覚的に違うなど。彼の議論は、ようするに、共同体というものが厳然として変わらない存在としてあって、それが存在するかぎり、あらゆる近代化、経済発展や工業化ができないのだという共同体不変論、共同体基礎論みたいなものですよ。アフリカをみて、では、共同体をどうやって壊すかということになったら、そんなものは簡単に壊せないし、アフリカの共同体というのは、やはり生きている人たちの一種の生活基盤ですから、そんなものを壊したら、近代化どころか社会全体が壊れてしまうという感覚があったんです。ですから、何とか現場に根ざした研究から攻めて、この論理にチャレンジしなきゃいけないと思ったんですよ。それが「アフリカの農業と土地保有制度」という研究会だったんですね。

赤羽理論に触発されて、いろいろやりはじめたという意味では、赤羽さんに感謝しています。アジ研独自のやり方として、現場から得た知識、あるいは感覚というものが、理論に反映されなければいけないと考えてきました。シンポジウムで原口さんは、実感にもとづいて研究をはじめなければいけないといっていますが、どうもそれをそのままやったような感じはするのですが。何か少しは理論めいたところに近づきたいとは思っていました。

——同じ時期に山田秀雄先生を主査とする植民地支配に関する研究会があって、林さんはそち

らに参加されています。その研究会は、その後、林さんの代表作といえる南部アフリカに関する研究会へと繋がるわけですが、そのあたりのいきさつをお伺いできますでしょうか。

林 原口さんのさきほどの発言をもう少し正確にいきますと、この当時アジ研で、中岡さんたちの働きかけもあって、大塚久雄、江口朴郎、住谷一彦、山田秀雄といった外部の著名な先生方を主査とする研究会が一斉に立てられたのです。私は、山田秀雄先生の研究会に所属しました。

赤羽さんの本が出版された後、山田先生の研究会と大塚先生の研究会を合同で開催し、合評会をやったことがありました。その合評会で、われわれはものすごく彼の本を批判したのですよ。大塚理論というのは、一言でいってしまえば類型論です。山田先生は植民地史学が専門なので、時間の要素が入っている。そここのところがものすごく違います。がんがん批判したのだから、山田先生と大塚先生の仲が悪くなっちゃった(笑)。われわれはおかしいところはおかしいと、その席でいったんですが、ちょっといいすぎたかもしれません。

山田研究会が目指したのは、もう一度植民地期に戻って、そこで現在のアフリカがどういう形で形成されてきたのか、考えようということです。時期的にいうと、1973年度の研究会ではアフリカ分割から第1次大戦までの間、1974年度の研究会では両大戦間期、こういうふうな時間をずらして2年やったんです。研究視角としては、植民地支配でヨーロッパ側はアフリカに投資をする、アフリカ側は労働を提供する。その両面から攻めてみようということです。

その両者が結び付くのはアフリカにできた企業や工場で、そこで資本と労働が結び付くはずなのですが、残念なことにそこまできませんでした。アフリカ外を専門とする人は、佐伯尤氏(当時、関東学院大学)のイギリスの投資とか、権上康男氏(当時、横浜国立大学)のフランスの投資の問題についてはよくやってくれたのだけれど、アフリカの分析にまでなかなか至らないんですね。われわれは逆にアフリカサイドから、労働の問題を分析するのですが、なかなか工場にまでたどり着かない。せいぜい出稼ぎ労働とか、農家経済とか、そこまでしかいかないのです。資本と労働が結び付くところまでできたらいいなと思うのですが、現在でもそこまで深い分析はなかなかないですね。南アフリカをやっている創価大学の西浦昭雄さんが、そこまで攻めてきたんじゃないかとは思いますが。

私はその後1年間、1975年度は南部アフリカ経済に関する個人研究をやりました。南アフリカの担当者は一人しかいないので、どう考えても南アフリカだけの研究会を組めない。それで、もう少し視野を広げて、南部アフリカというのに着目したんですね。その契機はモザンビークから南ア金鉱山への出稼ぎ労働でした。

その個人研究では、南アフリカを中心とした南部アフリカの支配・従属の關係に着目しました。南アフリカが周辺諸国を経済的な面で、いろいろな点で支配していると。具体的には、投資と貿易と出稼ぎ労働と輸送と関税同盟ですね。この5つのツールで南部を縛っているということ、この個人研究では分析しました。その上で、1976年度から南部全体を覆うような研究会を立ち上げたんですね。あとは一貫して、南

部アフリカについて研究を続けました。

ただ問題は、当時、南部アフリカは解放闘争の最中なんですね。ブラックアフリカ諸国は1960年代にほとんど独立していますけれども、この時期アンゴラとモザンビークが独立したばかりで、ジンバブエとかナミビアはまだ独立していません。解放闘争の最中なんです。それで、調査がものすごくしにくい。これがひとつの大きい問題でした。

もうひとつの問題は、当然、研究の中心は南アフリカなんですけど、アパルトヘイトを国際社会が批判しているので、南アフリカがその実態を明かさないので、たとえば投資に関して調査しようと、南アフリカの財務省や中央銀行にははずいぶん通ったのですが、どのくらい周辺諸国に投資しているか、まったく数字を出しませんでした。しょうがないので、逆側から、たとえばスワジランドに行って、南アフリカとの経済関係を調べました。ぼつぼつと数字は集まるのですが、大変な仕事でした。

——原口さんも1970年代に代表的な著作をお出しになっていらっしゃる(註10)。2年間個人研究をなさった後で、本をお書きになっていますが、どのような問題意識をおもちだったのでしょうか。理論的な要素もかなり含んだ成果だと思いますが、現地に行ったことと、理論的な著作を書かれたこととは、どうつながったのでしょうか。

**原口** 答えになっているかどうか知らないけれど、まず第1に、この本が成果として出てくる1975年の前の3年間ぐらいね、僕は対外的な接触を断ったんですよ。つまり、外からいろい

ろ原稿を頼まれるでしょう。僕は、ちょっと正確じゃないけど、2年か3年の間、一切引き受けるのをやめたんです。ちょっと引きこもりになろうと思って。その引きこもりの成果が、あえていえばこれですね。

引きこもって、僕はほんとうに必死になってモルガンの『古代社会』などを読んだんですよ。あんなこと、今のアジ研では許されないかもしれないけど、そのころはまだ「場末」で、誰も何も期待していないときだから……。ということでもないんだけど、そこからはじまって、一応まとめた。それから理論的ということをおわられたけれども、そのときに僕の問題意識のベースになっていたのは、やっぱりコート・ジボワールで、バウレ人と付き合い、アキエ人と付き合い(註11)、あなたがアキエ人で私が日本人だというのは何だ、という素朴な疑問ですね。そういうところから出発したのだから、その成果を『部族——その意味とコート・ジボワールの現実——』にまとめました。まあ、いまだに結局、僕の原点というのはこれだけだ、というぐらいです。

**島田** 私は当時吉田さんの土地保有制度の研究会に入れてもらっていたのですが、調査研究部なんかの研究会で発表したときのことは、いまだに憶えています。私は、アフリカの伝統的な土地所有に関する先行研究を読んで発表したのですが、すごく衝撃的だったのは、滝川さんが中心のアジアの土地制度研究会の人たちは、アフリカの話はよくわからないというんですよ。何遍聞いてもわからないと。まず、土地所有の話なのに地籍図のような地図が出てこない、という。そういうことをいわれたことは、ずっと

現在まで、ある意味で私の力になっていると思います。

当時、アフリカ研究というのは研究の視点が甘いというような形で批判されました。滝川さんが研究回顧の講演<sup>(註12)</sup>で述べておられるけれども、アジアでは、資本主義論争でも何でも「日本の場合と何かが違う」と連呼されているのですが、稲作をめぐって日本でなされていた議論とある程度比較できるんですよ。アフリカは畑作中心ですから、全然違います。稲作社会からアフリカを見ようなんて無理だと考えるほうが素直だと思うのだけれど。調査研究部の部内研究会なんかでは、アフリカ研究者の知っていることはわからないというわけです。

私はだから、当時「アフリカ研究は時流に乗っていない」とか、何かそういうことを、自覚させられる雰囲気があったと思うんです。調査研究部のなかでは、アジア研究が中心だった。東アジア、少なくとも東南アジアまでかな。アフリカは、それとやっぱり違うなと思っていました。

それともうひとつ、山田先生の研究会に、私は客分でもらっていました。そのときに思ったことは、ディシプリナリーな学問と地域研究との関係といった問題です。山田先生は以前にイギリス植民地史研究のなかで、ガーナに関するヒル (Polly Hill) の著作<sup>(註13)</sup>を扱われているのですが、そこで議論されている内容は、僕からいわせると、日本の資本主義論争からあまり出ていないんですね。

そのかわり、これはディシプリナリーな学問のすごさというか、山田先生は数字にもものすごく細かい先生で、当時60歳前後だったと思うんですけど、委員の誰かが投資額のデータを出す

とそれについて試算してくるんですよ。それで、ここは違うと研究会で批判する(笑)。私にすると、学問は恐ろしいと思う反面、アフリカの研究といった次元からみれば、投資の数字がそこで数パーセント違ってたって、どうってことないのになあ、と思うわけです。ものすごく違っていけば、この年は何だったのかもしれないけれど。そのときに思ったことは、これは学問的、専門的には正しいことだけれど、アフリカの地域研究として、有効かどうかはちょっと別かなということでした。滝川さんたちが日本の研究の延長線で東南アジア研究に踏み出したように、山田先生は植民地支配という観点から帝国主義論を踏まえたくて、投資を媒介とした新しい帝国主義論みたいなものがわかるんじゃないかという、満々たる自信があったように思います。

#### IV アフリカ総合研究事業

——1980年代の話に移ります。1985年にアフリカ総合研究プロジェクトがはじまり、望月克哉さんと児玉谷史朗さん(現一橋大学)がその年に入所されます。一方、島田さんは同じ頃大学に移られています。その頃になると、人も入れ替わってきた。アフリカ総合研究プロジェクトがはじまると、情報分析誌の『アフリカレポート』が発刊され、研究会も当初は1年単位で、目まぐるしく成果が出るようになった。

この1980年代の動きを振り返って、どのようにお感じになっておられるでしょうか。初代のアフリカ総合研究プロジェクト・コーディネーターを務められた吉田さんから、お話を伺えますでしょうか。

吉田 アフリカ総合研究プロジェクトができるのは非常に難産でした(笑)。これは自分たちが発想したのではなくて、監督官庁の通商産業省(現経済産業省)から持ち込まれたプロジェクトだったわけです。その前に、ラテンアメリカ総合研究事業が発足していて、通産省はこれをアフリカや中東にも広げていこうという発想のもとに、アジア研に「やってくれ」といつてきたんだと思うんですね。どうしてそういうことになったかという、たぶん通産省としては、アジア研に時宜的なテーマの研究をもう少しやってほしいとの考えがあったのです。動向分析部はあるけど、あれはアジアだけを扱っているから、ほかの地域についても同じような動向研究的なことをやってほしいというニーズがあったと思うんです。

私の発想としては、もう少し長い間価値をもつ研究、日本だけではなく、外国の研究者とも太刀打ちでき、アフリカの人たちとも対話できるような研究ということを考えていたのです。そういう研究はあまりにも時間がかかりすぎると、たぶん通産省からは考えられたと思うんですね。

ラテンアメリカ総合研究事業では、刊行物の『ラテンアメリカレポート』を当初年4回出していた。そんなことを少人数のアフリカ研究グループではとてもできないということで、東京にいたアフリカ担当の面々でわいわい議論したわけです。ちょうどそのとき林さんはロンドンに行っていて、私と原口さんと細見さんしかいなかった。3人でいくら議論しても堂々巡りでね(笑)。あまりにもしょっちゅう集まって大声を張り上げているから、議論していると、みんな会議室をのぞきに来るんですよ。何が起

こっているのかと(笑)。それでも延々とやっけていてね。結局、最後に、もう予算が付くかどうかというときになったわけですよ。そうしたら、総合研究事業を管轄していた当時の調査企画室から、「年に4回出さなくてもいい」といつてきたんですね。2回でいいと。

それで、『アフリカレポート』を年に2回出すことになり、研究会もそのために立ち上げて、最初の研究会は原口さんが主査となって、成果が『アジア経済』の特集号<sup>(註14)</sup>になりましたが、研究双書としては私が編者となった『80年代アフリカ諸国の経済危機と開発政策』<sup>(註15)</sup>が最初でした。

『アフリカレポート』だけではなくて、ちゃんと研究会を立ち上げたわけですね。それまでの研究会は絞り込んだテーマを掲げたものが多かったのですが、これはかなり包括的なテーマです。研究会の問題意識に関しては、私が前書きに書いていますが、世界銀行の「バグ報告」<sup>(註16)</sup>が1980年代初頭に刊行されて、アフリカの経済危機は政策の失敗だという主張がなされたんですね。一方、学界では世界的に、世界銀行などが主導する経済構造調整は外から押し付けた経済政策だという見方が圧倒的に強かったんですね。『80年代アフリカ諸国の経済危機と開発政策』の問題意識は、確かに外から経済政策の押し付けがあるけれども、それを外からだけみたのでは、ほんとうのアフリカの問題はわからないというところがありました。構造調整政策の最大の欠点は、あらゆるアフリカの国に同様の経済自由化政策を取らせたところであって、個々の国の特殊性を全部捨象してしまっただけですよ。ですから、個々のアフリカの問題を、各国別で、内側からみないといけな

いという意識で、やっていたんです。

アフリカの経済政策の問題点を指摘した点では「バーグ報告」に似ているけれど、「バーグ報告」は外からみてそれを指摘しています。我々は個々のアフリカ諸国でどのように政策が形成されるかに主眼を置いて分析したつもりです。それまでのアジ研のアフリカ研究は、こうしたマクロの問題を扱ってきませんでした。経済危機というのは一応、「国」の危機とここではとらえていて、いろいろな経済危機を、たとえば外貨の問題だとか、あるいは農業発展の問題だとか、開発公社の問題といった側面で分析しています。

アフリカ総合研究事業について、まずプラスの面からいいますと、人材を採れる基盤ができたということですね。アジ研の規程をみますと、それまではずっと「アフリカ」という言葉が表に出ず、「アジア等の研究を行う」という「等」のなかに入れていました。それが、「アフリカ研究」という形で打ち出せるようになり、その研究のために必要な人材が採用できるようになったわけです。

それから、研究所内の他の地域の総合研究事業と違って、アフリカ研究者全員がこれに協力するやり方になったのは、すごくよかったと思います。たとえばラテンアメリカだと、総合研究事業にかかわっている人と、かかわっていない人が画然と分かれていたと思うのですが、アフリカの場合は、アフリカをやっている研究者すべてと、それから図書資料部（現アジア経済研究所図書館）がすごく支援してくれました。たとえば、図書資料部でアフリカ担当だった村野勉さんがアフリカ総合研究を整備するためにかなり努力してくれた。統計部も同じように協

力してくれて、だから、初期の『アフリカレポート』には、図書資料部と統計部の人はずいぶん書いていますよね。そういうふうには、アジ研でアフリカにかかわっている人全員が、協力してやりはじめたという点では、とてもよかったと思います。

——原口さんにお伺いします。原口さんは、アフリカ総合研究事業がはじまるときは批判的だったとお伺いしましたがけれども、はじめた後は主査も熱心になさったし、『アフリカレポート』を楽しんで作っていらした（笑）との印象を私はもっています。アフリカ総合研究事業のあり方や、『アフリカレポート』という媒体について、いかがお考えでしょうか。

**原口** 吉田さんもちょっといわれたけれど、アフリカ総合が立ち上がる時、僕は、『アフリカレポート』というものが年4回発行になるか、年2回になるか。人がどのくらい取れるか。それから、この総合プロジェクトに海外派遣の予算が付くか。この3つの条件闘争だと思っていました。

でも、すったもんだ、中心的には、吉田さんと僕と細見さんかな、最後には池野旬さん（現京都大学）も海外派遣から一時帰国してもらって4人になって、どうするかって議論して。結局、吉田さんのもとでまとまって。アフリカグループのなかは、当然賛成と反対に割れました。しかし、最終的には一致して総合研究事業に協力したところがアフリカのなんですね。すごく、けんかはしていたんだけど。まあ、吉田さんは苦勞されたと思うけども、そんなことこっちは知ったことじゃないから（笑）。それ

で、こちら側の希望した条件は、すべて満たされたわけですよ、結果的にね。それまでは、池野さんを最後に新人が来ていなかったわけだから。

『アフリカレポート』にしても、僕なんか頭が固いから、最初のうちは、50枚ぐらいの論文ではなくて、注のない20枚ぐらいのレポートばかり書いていると、論文が書けなくなってしまう、だからよくないとか何とか、そういう観念的なことを一生懸命いっていたんですよ。でも、結果的に、津田みわさんと編集をやっていた時代かな、若い人たちのなかで、アフリカについて何かやってみたいという人のステップとして、けっこう『アフリカレポート』は役に立つ面があるかな、という気がしましたよ。だから、注が付いた50枚の論文じゃなきゃいけないというのは、やっぱりかたくなだったかなと思うけれど(笑)。当時は吉田さんに食ってかかっていたんですよ。

ということで、アフリカ総合研究事業の発足というのは、我々の歴史のひとつの転換点でしょうね。

——林さんは、1986年の4月にイギリスから戻られました。ですから、後になってアフリカ総合研究事業に加わられたわけですが、1990年代になるとコーディネーターを務められ、その後は地域研究部(旧調査研究部)の部長をなさっています。そのあたりのお仕事というのは、思い返してみてもいかがでしょうか。

**林** ちょっと前に戻りますけれど、アフリカ総合研究事業の話が出たとき、私はロンドンにいたんですよ。吉田さんからはしょっちゅう連絡

を受けていました。私は基本的に初めから賛成の立場でした。その理由の第1は、予算の問題なんです。これをやると毎年かなりの規模の予算が付くわけです。研究というのは、お金がなくてもできると考える人がいますけれども、そんなことはないですよ。お金が絶対必要なんです(笑)。これがひとつ。

それからもうひとつは、もう話に出ていたけれど、人員の問題なんですね。島田さんが少し前に辞められて、池野さんの後、誰も来ない。これではジリ貧になって、アフリカ研究はつぶれてしまう。その2点から、私は基本的に賛成だと。

1984~1986年にロンドンに行っていて、帰ってきてすぐ総合研究事業のお手伝いをしようと思ったのですが、南アフリカが動き出し始めてね。1985年に人種別三院制議会が導入されたことで、反アパルトヘイト運動がものすごく高まった。それが続いて、人種差別体制が崩壊するのですが。そのときに研究所から、早急に南アフリカのアパルトヘイトがどうなるのか調べてほしいといわれて、「南アフリカ変革の行方」という1年間のプロジェクトを1986年に組みました。これは私一人ではできないので、吉田さんと望月さんに協力していただき、3人で現地調査をした。手分けして調べて、1年で報告を書きました。

このときの成果は一般向けの書籍になりました<sup>(註17)</sup>。一般にアジ研の研究双書は文章が硬くて読みにくいというので、広報部の松谷賢次郎さんが、私たちの書いた文章をわかりやすい文章に直してくれました。ですから、この本はずいぶん易しい文章になっていると思います。われわれは研究双書なんかを書けるけれども、

やっぱり一般の人には、あれじゃわからない。そういうことをこのとき強く感じました。その後、私はかなり気を付けて書くようになったつもりなのですが、これがひとつの大きいきっかけです。

アフリカ総合研究プロジェクトの特徴として、個々の国とか個々の地域ではなくて、アフリカ全体を扱わなければならないという制約がありました。それで、1987年に「地域協力と援助の役割」という研究会を立ち上げたんです。

1980年代というのは世界銀行の構造調整政策が大きい問題になるのですが、それに対してアフリカ側では、ECA（アフリカ経済委員会）が「ラゴス行動計画」というのを出した。その大きな眼目は、経済自立でした。それともうひとつは、地域協力なんですね。アフリカの国は、小さな国が多いのですが、それがある程度、団結すれば、規模の経済ができてくるのだらうというもので、各地域をまたいで、いくつかの地域協力機構ができました。一方で、1981年に「バーグ報告」が出た後で、構造調整が現実はどう動いているのか。この2つを分析することを目指して、「地域協力と援助の役割」研究会を立ち上げました。

次の年は、吉田さんが地域研究部長になられたんじゃないかと思います。それで私にアフリカ総合研究事業のコーディネーターを任された。とにかくアフリカ総合研究を動かさなくてはいけないというので考えたのが、「農村社会の再編成」、「都市社会の再編成」といった研究会でした。これは3年間の計画で、アフリカの現実を動かしている政治家の支持層が農村にあるのか、都市にあるのか、これを調べることによって、今後アフリカがどのように動くのかを探ろ

うというのが目的でした。ただし、3年目は確か私が地域研究部長になってしまったので、ほっぽりだしてしまう形になって、完結していないという弱みはあります。そういうことで、原口さんの後を引き受けて、何年間かこの総合研究を動かしたつもりです。

ただし、それをやっているうちに問題を感じたのは、こんなことをやっていると、専門の南部アフリカの研究がどんどん遅れちゃう。総合研究をやる以上、南部アフリカばかりやっているわけにはいかないからです。それで、総合研究事業のなかに南部アフリカに関する研究会を別に立てて、複数研究会体制にしたいと、吉田さんをお願いしたんです。初め吉田さんは拒否されました。やっぱり、それなりにひとつにまとまってやるべきだということをいわれたのですが、結局私の独断で、1990年代の初め、総合研究事業から一時離れて、南部アフリカに関する研究会を立てました。この時期になりますと民主化の動きがものすごく強くなって、南部アフリカでもどんどん民主化の動きが起きているわけですね。それを追っていかなくちゃいけないということで、複数の研究会を立てさせてもらったいきさつがあります。

## V とりまとめの時期

——1990年代になると、みなさんアジ研でのお仕事の取りまとめの時期に入られます。1990年代初めには、創立30周年記念出版として地域研究のリーディングスが刊行され、吉田さんが「アフリカ」に関する2冊のリーディングスをまとめられています<sup>(註18)</sup>。その頃に吉田さんは大学に移られるのですね。

吉田 そうですね。私は1991年に中部大学に移っていますから、このリーディングスを出版する段階ではもういなくなったわけですけど。これは、山口博一さん（のち文教大学）が主査になって研究会を立ち上げて、地域研究とは何かということを議論したわけです。研究会は「地域研究の課題と展望」という名前でした。アジ研の特徴は地域研究だといわれているわけですが、実際われわれが、地域研究とは何かと突き詰めて議論することはあまりなかった。それを少し詰めてやろうということで、それぞれの地域で今までやったことを整理しようということになって、その結果がこれなんです。

ひとつの地域で2冊出したところが多かったのですが、アフリカはほかの地域とちょっと違っていました。ほかの地域は大体2冊出すと、1冊は政治、1冊は経済というようにディシプリンで分けたのですが、アフリカだけはディシプリンで分けなかった。私は編者として、ミクロとマクロという分け方で2冊を分けたつもりです。地域的なものとか、いわゆる共同体的なものとか、そういう近づいてみなければみえないものをミクロとして、国家に関わる諸問題や国際関係といったものをマクロという形でとらえようと思いました。アフリカだけはそういう分け方でやったのです。

第1分冊（ミクロ）のほうには原口さんが研究した部族の問題や、初期のアジ研の研究テーマとして重要だった民族主義運動に関するものとして、中村弘光さんの「ナイジェリアにおけるナショナリズムの展開とその特質」を採録しました。また、土地保有や農業社会の変容といった問題として、赤羽さんの論文などを入れました。一方、第2分冊（マクロ）のほうは、

農業社会における資本主義の浸透、都市化とインフォーマル・セクター、国家と外国資本、そして国際関係といった問題群を扱った論文を採録しています。

ようするに、ミクロからマクロへわたる、いろいろな問題をアジ研がやってきたことの例をここへ出したつもりです。しかし、では地域研究とは何かというと、なかなか結論としてははっきりと出ていません。山口研究会でも、結論が出ていなかったし、私のこの編集した2冊でもあまり確定的なことはいっていません。ただ、インターディシプリンの問題として地域研究があるのだということは、この2冊を政治と経済とに分けなかったことによって、示したつもりなのです。

原口 地域研究の方法論について一言いうと、もっと前の1968年に三木巨さん（当時、東京外国語大学）がアジ研の所内資料で『地域研究と世界認識』<sup>(註19)</sup>を書かれたんですよ。それに対して、アジ研の林武さんが1969年3月に『現代地域研究論』<sup>(註20)</sup>というものを書いた。それで、僕も同じ年の6月に、林武さんの議論を批判する報告を書いて、調査研究部の部内研究会で発表したんです。部内研究会では大論争になったんですよ。そこに出席していた東畑精一先生が「これは何が書いてあるのかわからない」といわれたんです。僕の書いたものが、かの東畑先生にも理解できないものだったということです。僕はこれを聞いて「やった」と思った。

吉田さんが今いったことで、ひとついいなと思ったのは、アフリカだけが政治・経済で分けてないんですよ。地域研究というのはそういう

ものだと、僕は思っているのだけれど。

——原口さんは1994年の3月にアジ研をお辞めになりますが、その前は主査をずっと引き受けられていますね。さらに、1982年から1990年の間にコート・ジボワールに2年ずつ2回赴任されたりと、かなりお忙しかった感じがします。原口さんはアジ研の仕事の集大成という意識で、何かまとめられたり、考えられたりしたことはありましたか。

**原口** それはないですね。吉田さんがまとめられた地域研究のリーディングスには、私の過去の著作を抜粋してもらっていますけれど、その後にまともに出したものはないですね。あえていえば、退職後、アジ研から出版していただいた、『部族と国家——その意味とコート・ジボワールの現実——』（1996年）ですかね。

——林さんは1998年まで在職されて、最後に単著を1冊まとめられています。ご自分のアジ研での研究を集大成しようという意識をもっていらしたのですか。

**林** そうですね。それはかなりはっきりもっていました。それで、さっきの話の続きで1990年代の話になるのですが、総合研究だけではなく、南部アフリカの研究を続けたいと思っていました。南部アフリカの民主化の動きが起っていますから、1991～1992年度にはそれをやった。

その後、1993～1994年度にはまた総合研究に戻って研究会を立てました。冷戦が終結した後に、先進国の援助が東欧などに流れてアフリ

カ向けの援助が少なくなるのではないかといわれた。その点を中心に国際社会の対アフリカ政策について調べたんです。アフリカ全体をカバーしなくてはいけないという制約のもとで、世界銀行とか国際通貨基金（IMF）、そして主要先進国のアメリカやフランスの対アフリカ援助がどう変わったか、といった点を研究しました。その後、もう一度南部アフリカに戻りまして、1995～1996年度の研究会では、南部アフリカ諸国の民主化がうまくいっているのかを調べました。うまくいっていないというのがその結論だったんですが。

そういうなかで、もう定年が近づいたので、そろそろ今までの仕事をまとめなくてはいけないと思い、最後の1年は個人研究を許してもらいました。私は研究所に入ってから3回、個人研究をやっています。一番初めは、さっきお話しした、1975年に南部アフリカの従属的な経済関係を図式化する。このために個人研究をやったんですね。それから、1980年に南アフリカのアパルトヘイトに関するネオマルキシズム派と自由主義派の論争について、個人研究を行いました。

そして最後の1年の個人研究の成果は、『南部アフリカ政治経済論』という単著で出しました<sup>(註21)</sup>。これは、今までやったものの集大成でして、南部アフリカの経済的な従属関係もこのなかで論じています。ただ、最後の章で地域協力を扱ったのですが、経済面を中心とする南部アフリカ開発共同体（SADCC）までは分析できたものの、安全保障について扱えなかったのが心残りではあります。でも、とにかく、私が研究所に入ってから、ずっとやってきたもののエッセンスは、ここに全部詰め込んだと思いま

す。

## VI 外からみたアジ研

—みなさん、1990年代には大学に移られるわけですが、一足先に外に出られていた島田さんに、外からみてアジ研がどうみえたかということをお伺いしたいと思います。島田さんは1980年代半ばから東北大と立教大におられ、1990年代の半ばに京都大に移られますが、アジ研がどうみえたかということをお聞かせ願えますでしょうか。

島田 『アフリカレポート』がはじまった後のアジ研のことは、あまりに変化が激しくて、よく理解していません。ほんとうにわからなかったんです。たくさん若い人たちが入って、なおかつ、どんどん時事的なこともやるから、外にいて、私がいたときよりも、研究がすごく盛んになったなという感じをもっていました。

ただ、大学に出て、私が素直に感じたのは、解放感でした。アジ研では入ったときから、その国の専門家でなければいけないという意識が常にどこかにありますから、自分の場合はナイジェリアという国民国家、国民経済、政治が頭にあったのです。けれども、大学に移ったときに感じたのは、「おれはナイジェリアをやらなくてもいいんだ」というすごい解放感でした(笑)。妙なことですが。

つまり、ナイジェリアというのは非常に大きくて、本を読んでも読んでも、よくわからないのです。だけれど、1983年に初めて僕は南部・東アフリカをみたんですね。ケニアとザンビアとジンバブエ。びっくりしちゃって、こん

なところもあるのかと思って。やっぱりアフリカといっても国によってずいぶん違うなど。それからザンビアの本などを読みはじめたら、すごくよくわかる、理解がすごく簡単にできる気がしますね。簡単にできて、なおかつ、それが有効なんですよ。有効という意味は、政府が何か政策を出したときに、それがかなりの程度、下の農村部に行っても効いているわけです。ナイジェリアの場合は、政府の政策をどれだけ読んでも、恐らくそれはまったく意味がないといってもいいぐらい、農村社会の動きをつかむのが難しいのです。この研究のあり方の違いというのは以前からすごく認識していました。それで大学に移って、ナイジェリアにとらわれなくていいとなったとき、それではザンビアでやってみようかと。それでザンビアで10年間やった。

もうひとつは、大学に移って、若手の人たちが相手にしてみていると、僕がアジ研にいた1970年代というのは、ある意味では僕にとっては大学院だったなと思うことがありました。先輩諸氏がいて、もうゼミですらある。毎日3時になると、お茶飲み場でコーヒーを飲んでいて。あそこでコーヒーを飲んで1時間ぐらい話をする。先輩諸氏にとっては閑話休題のような話かもしれないけれど、若い者にとっては豊穡な耳学問ですよ。あんないいゼミはないですよ。それと、朝、調査研究部のお茶飲み場に行くと、必ず論客が来ていて、30分でも1時間でも、話していました。従属理論とか、中国の文化大革命とかを巡って、あそこで論争しているわけですよ。それをただで聞けるといって、ものすごくいいサロンだった。

『アフリカレポート』がはじまってからとい

うのは、みんな走っている感じがしてね。走っていることが、そのまま蓄積になる人もいます。確かにそれでやってるなという人もいるけれど、研究者によっては、毎年走らなきゃいけないことで、つぶれる人もいると思うんですね。だから、これは大変じゃないかな。30歳くらいを過ぎて、自分の研究の基礎が固まってきた後で「毎年走れ」というのは、これはまあ誰でもできることなだけけれど。若手の研究者の育成にとって、私が辞めた後の体制がいいのかなと思ったときに、外からみていてはらはらしました。いけないんじゃないかなというのが、どっちかという強い気持ちです。学生にたとえるなら、修士レベルか博士レベルの人が毎年、その年のテーマを追わなきゃいけないわけですね。だから、それはかなりきつい。ようやく私は、2000年を超えてから本を書いたんだけど、ひとつのことを10年間やっているようなのんびりしたことが、今の大学ではできるわけですね。

私がいた1970年代というのは、10年でひとつ本を書いていけばいいような雰囲気がありました。確か1980年、僕は海外派遣から帰ってきた直後に、研究体制を考え直そうという委員会があって、そこに入れられたんですよ。そのときに、50代の人が毎年のように論文1本書かなきゃいけないのは、おかしいんじゃないかという議論がありました。4~5年で、一冊本を書けばいいんじゃないかと。そういう議論もやったのだけれど、結局つぶれちゃいました。どうしてつぶれたのか知らないけれど。

それとも関連しておもしろい議論もありました。あるとき中村弘光さんと小島麗逸さん（のち大東文化大学）が、調査研究部の部内研究会

の場でけんかしたんですよ。どういうけんかかといったら、ある日の部内研究会で、いっぱい寝た人がいたんです。それに対し中村弘光さんが怒ったのです。部内研究会で眠るとは、何事かと。そうしたら、小島麗逸さんが「眠るような発表をしたやつが悪いんだ」といって。これがきっかけで、調査研究部の部内研究会をどういう具合にやるかという委員会ができて、調査研究部長に答申したことがあります。あれもどうなったのか知りませんが。

外からみていたら、アジ研のアフリカグループは忙しくなったなと思います。今は、大学もすごく忙しくなっているんだけど。調査関係の資金的なことといえば、科研費さえ取れば、大学はアジ研にいるよりもずっと潤沢でですよ。もちろん競争的資金だから、毎年取れるわけじゃないけれども、それなりにしっかり準備すれば取れます。自分たちのイニシアチブで、誰かから何かをいわれる要請もなく、自分たちの問題意識のみにしたがってプログラムを作って、研究資金がもらえます。そうしたときに、それとどこでアジ研が競争できるかということも問われる。

もう一方では、そういうレベルじゃなくて、たとえばJICAの研究所だとか、企業の研究機関とか、そういうところとの競争もありますね。だから、どこを対象にすればいいか。大学の先生と競争する必要はまったくないと思うんだけど、でも、アジ研の比較優位はどこにあるかという点は考える必要があると思います。その点、『アフリカレポート』のように時事的なものを追うことは大学の先生には無理ですから、大切な発信ツールではあると思います。

もうひとつは、何かアフリカで大きな変動が

あったときに、日本中の研究者を集めて、研究会を組織することに関しても、アジ研が有利ですよね。あるテーマで科研費プロジェクトを作ろうなんていったら、だいたい2~3年後になり、メンバーも固定的になるけれど、アジ研の場合は動きやすいと思います。だから、その点では、何かアジ研で柔軟性のある研究プロジェクトが組織できる体制をつくるのもひとつの方法かも知れません。

——吉田さんも大学のお仕事を長く経験されていますが、アジ研がどのようにみえたか、どういう方向を目指していくべきなのかという点について、ご意見をお聞かせください。

**吉田** 私が大学に行ってすごく感じたのは、ほかの先生方が学問的にどういう興味をもっているかとか、どういうことを今研究しているかということが、あまりわからないんですよ。アジ研のなかは、お互いがすごくよくわかっていて、あの人はこういうことをやって、この人はこういうことをやってというのがわかるけど、大学だとやっぱり一国一城のあるじ的だから。そういう意味では、大学の先生のほうが孤独に研究を進めておられますね。逆に、ほかの大学で同じテーマをやっている人との関係は、緊密なのかもしれない。でも、近くにいる人が何を研究しているかよく知っているということは、アジ研の大きな強みなんじゃないかな。だから、内部で共同研究を組みやすい。それは強みだなと感じます。

あと、やはり理論化というか、そういう方向へアジ研として、もう少し行くべきではないかとも思います。理論化というとちょっと語弊が

あるのだけど、現地調査の積み重ねから帰納的な理論化を目ざす必要がある。原口さんがもともといていたようなことは、結局、独自の理論化が必要だということだったような気がするんですね。原口さんがシンポジウムで2つの例として出したうちのひとつは、サル学の今西錦司さんだけど、彼は理論化しているわけですよ。もうひとつの例の寺本光朗さんは、理論が先にありきで、何をみても同じという感じになっている。あれも一種の理論をもっているわけですが。アジ研としては、具体的なものをずっとみるなかで、帰納的に理論化できるものがあるんじゃないかなと考えてきました。そっちのほうは、アジ研としてもっと追求すべきことじゃないかと思います。具体から出発しているから応用がきく理論です。

だから、島田さんが最近書いた本<sup>(註22)</sup>を読んで、すごい理論家になったなという感じがしたんです。理論家というよりも、いろいろな人の理論を利用して、そのなかから「観察する視角」を取り出しているというべきかな。農民といっても、移動する存在であるというような視角が、島田さんのなかから最近は出てきている。だから、そういう一種の視角が、もうちょっと進めば理論になるかもしれない。そういうところまで、アジ研も努力するべきだという感じはします。一般にアフリカを研究している日本人たちが理論化というときは、欧米の理論をそのまま借用しているような感じがするので、もう少し独自の理論化ができるんじゃないかという考えを私はもっています。

——外からみてという点で、原口さんは何かありますか。

原口 あまり外からみたことがないんだけど。ひとつはやっぱり、アジ研のなかには、飼い慣らされていない状態の、まだ何かわけのわからない人がたくさんいて、それが少なくとも何かを育てるひとつの土壌になっているという意識を、若いときからずっともっているんです。

でも、アカデミズムの関係でいうと、島田さんみたいに「大企業」にいる方はともかくとして、研究に関するならアジ研ほどいいところはないと思います。少なくとも若い人だったら。年を取って管理職になったら、しょうがないとして。

それともうひとつは、日本のアカデミズムのなかで、アジ研育ちが200人ぐらいいるわけでしょう。日本のアカデミズムのなかにごろごろ、どこに行ってもアジ研に当たるぐらいにいて、大きなネットワークになっている。

それから、僕はやっぱりアジ研のなかでもアフリカ研究だけがもっている可能性があると思うんだよ。その象徴は吉田さんのリーディングスにあるように、地域研究としてね、政治経済すべてをみる。これは未分化といえるかもしれないけれども、未分化でない何かをと期待しますね。

島田 地域研究といえば、私が所属する京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科は、日本で唯一、文科省が認めた地域研究の大学院なんです。その時に、「じゃあ、地域研究の専門家の博士号を取るような大学院生をどういうふうに育てるのか」と、問われるのですが、教員のなかでもまとまっていないわけです。さまざまな学部を卒業してきた学生に対して、オリエンテーションのときに、「専門をまず捨てな

さい」なんて、一見無謀なことをいうのです。いわれた学生は、どうしていいかわからないんですよ。ほんとうの意味は、全部捨てろというのではなくて、学部の時代までもってきたことをベースにして、ほかのところに手を出してほしいと思っているわけだけど。

だから、たとえばさっきの議論で、大塚史学の共同体理論といったときに、そのままずっと赤羽さんのようにいくのか。赤羽さんは、不幸にも現地調査に行く前に亡くなったのだけれど、あの人が現地調査に行っていたら、帰ってきたときは恐らくかなり違っていたと思うんですよ。地域研究の教育では、それを早めてあげたいということ。ディシプリンでトレーニングされてきた我々が教員になっているんだけど、新しく来た地域研究の学生に対しては、少し早い段階から意識的に、手を横に広げてごらんと。そうしないかぎりは、たとえば経済学部で、私は経済とアフリカに関心があるという学生は、経済学部の大学院に行ってもらったほうがいいんですよ。

アジ研に関して私がすごく気になっているのは、若手の人をどう育てるかというのが、現在よくみえなくなっているような気がするんですよ。それをどうしたらいいのか。たとえば、海外派遣ですね。現地主義はいいのだけれど、現地でどう過ごさせるか。京都大のやり方は「とにかく村へ入りなさい」といって、田舎の村に学生を突っ込むんだけど、あれはひとつの方法論で、すごく学生の思考方法も変えます。単なる調査方法論だけの問題ではないですよ。背後にある思想もあるけれども、そういう入り方をすることによって、全然変わりますよね。

吉田 結局、自分で会得するしかないんじゃないですかね。教えることはないんじゃないかと(笑)。私はそう思うよ。

——林さん、いかがでしょう。外からご覧になってという点ですが。

林 基本的には、たとえば速報性だったら、どう考えてもマスコミにはかないません。一方、大学はさっき島田さんがいわれたように、教育というのがありますからね。極端にいうと、研究しなくてもいいんですよ。ほんとうは、研究と教育が両輪なんですけどね。テーマもまったく個人で自由です。どんなテーマを選んでもいい。

ところが、アジ研の場合はそうはいかない。社会的な要請に応えるという大眼目があるわけですよ。これは現在、独立行政法人に移行しても変わらないと思うんだけどね。そうなると、自分の担当している国、あるいは地域の問題と常に緊張関係をもっていないといけない。何らかの形で外から、社会から要請がある。それに応える義務があるんですね。そのためには絶えず現地と緊張関係を結んでないといけない。さっき島田さんが、大学に移って緊張感が薄れたといわれていましたが、私もまったくそんなですよ。

新聞社から問い合わせの電話がかかってきても、大学なら「知らない」でいいんですよ。だけど、アジ研にいる間は答えなくちゃいけない。だって、社会的な要請に応えるということが眼目なんだから。そういう意味から、望ましいテーマとか、アジ研の今後、比較優位のテーマとか、私はそれはちょっといえない。それぞれの研究者が対象国、対象地域にとって核心だと

思うものを探りながら、外からの要請に何らかの形で応えなくてはならない。そういう緊張関係を常に保っているということが、一番重要な点ですね。

アジ研のいい点として、ひとつはさきほど例を出しましたが、南アフリカの調査のとき、吉田さん、望月さんと行きました。吉田さんは農業という専門で、地域は違いますけれど、農業が主。それから望月さんは政治をやっていたからね。そういうふうに、身近に同じアフリカニストがいるから、グループを組んで調査に行ける。ただしその前提として、やはり予算が必要なんですけどね。

それからもう1点は、海外との共同研究です。総合研究事業を引き受けるとき、「国際ワークショップを毎年開く」という制約が付いたと思います。当時あれは、かなり苦痛でね。1年間、研究会をやって、年度末には人を呼ぶ。呼ぶためには、途中で交渉に行かなくてはならないわけですよ。かなりきつかった。でも、あとでずいぶん役に立ちました。ああいうワークショップを何回もやった経験が、後でいろいろな国際会議の際にずいぶん生かされたと思います。ですから、アジ研は今後予算がどうなっていくのか知らないけれども、あれはやっぱりつぶさないようにして、常に、特にアフリカの研究者とのつながりを保ってほしい。アフリカはやはりお金がないから、日本に呼ぶか、日本人の研究者がアフリカに行って何かやるか、そういう海外共同研究を活発にしてほしい。一番の利点は、発表を英語かフランス語かでやりますから、世界に知らせるといった利点があるわけですよ。総合研究事業によって年に1回国際ワークショップが開けたというのは、かなり利点が

あったような気がしますね。

それから最後なんですが、アジ研の最大の財産は図書館ですよ。あれだけの図書館というのは、少なくとも私は日本では他に知らないですよ。あれだけの資料をもっているところはないので、最大限有効に使うべきだと思うんです。資料というのは、絶えず更新しなければいけない。そのために図書館の人とよく交流すること、主体はやはり研究者のほうですから、研究者が必要なのはどんどん注文を出して買ってもらうという体制は、今後もぜひ維持していただきたいですね。

**原口** アジ研について遺言的にいえば、遊びをもっと復活してもらいたい。遊びの精神というか、無駄がなきゃ駄目なんですよ。

島田さんがこの間、研究の評価について新しい構想が必要だというようなことをいったと思うんだけど、それを発展させてほしいんだ。

1年間で50枚の論文とかという評価の仕方ではなくて、遊びがいい研究を生むのだという雰囲気、アジ研に復活してくれないかなと。

それと、島田さんがいったコーヒーショップ。3時にコーヒーを淹れたのは、ほとんど僕でした。そうすると、ほかの部の人とか、JICAの人まで集まってきてましたね。そのこと自体は無駄なようだけれども。人物的にも、もっと無駄なやつを抱えたらいいと思うんだな。最近いいでしょう、あまり無駄な感じの人というのは。

**島田** 最近忙しいんだと思います。研究所に行っても、みんな個室に入って、一緒にコーヒーを飲むという雰囲気はあまりないように

みえます。昔は、お茶飲み場でも、朝行ったら、そこに必ずしゃべりたくてしょうがない人が、いっぱいいたよね。

誰かが来るのを待ち構えているわけですよ。毎日のように、あそこでしゃべっていて。でも、あれは若手の者にとっては、ものすごくおもしろかったし、あのときの情報の伝達量は非常に大きかったんじゃないかと思うね。だから、みんな我々が学部卒でアジ研に入っても、大学院みたいなものですよ。ゼミみたいなものですよ。だから、私はすごく得したと思います。

**吉田** 確かに個室はいいと思うんだけど、それを補うものとして、広場的な、何かそれこそみんなでコーヒーを飲む場所とか、そういうものがあって、みんなまずそこへ行ってコーヒーを飲む。そんな、お互いに話すチャンスがあるという設定を作ってほしいなと思うんだけど。

**島田** 外国の大学に行っても、共通のコーヒーを飲んだりする所には、常に誰かがいますね。今の研究所の雰囲気は、何となくみんな忙しいでしょう。あれが何なのか。個人レベルの忙しさが災いして、お互いに損をしている気がするんです。お互いの研究の成果は書いた活字では読めるけれど、それは結果ですよ。研究論文や本を書く前の仕込みの段階で、もっと自由な意見交換の場があれば将来もっといい成果が出ると思います。どんな情報がどこで入ったのかわからないけど、それが10年後、5年後に出てくるということがあるわけでしょう。そういうのを話したり聞いたりする場があるといいよね。さっき原口さんは遊びといたけど、余裕といってもいいですよ。とりわけ5年後、10

年後のある若手には余裕がないといけないと思いますね。

——本日はどうもありがとうございました。

(注1) ウジャマー社会主義とはタンザニアの初代大統領ニエレレ (Julius K. Nyerere) が提唱した思想で、アフリカの伝統社会に存在した共同体の相互扶助、共同所有、平等といった価値を現代に再現しようとした。1967年のアルーシャ宣言で、集村化による農村開発など具体的な施策が打ち出された。

(注2) 「シンポジウム『日本におけるアフリカ研究』」『アジア経済』第11巻第2号 1970年 58～79ページ。

(注3) 上原専祿「アジア・アフリカ研究の問題点」『思想』第468号 1963年 31～41ページ。

(注4) 毎週1回の研究報告会は、地域研究センターが中心となった「地域研究会」として現在も続けられている。

(注5) 大野盛雄編『アジアの農村』東京大学出版会 1969年。

(注6) 赤羽裕『低開発経済分析序説』岩波書店 1971年。

(注7) 吉田昌夫編『アフリカの農業と土地保有』アジア経済研究所 1975年。

(注8) なお、赤羽理論に関しては、原口氏も理論的応答を行っている。原口武彦「第三世界と共同体——一つの赤羽理論批判——」『経済評論』第28巻第8号 1979年 54～64ページ。

(注9) 赤羽裕「ブラック・アフリカにおける『農業・土地制度改革』の諸問題」「後進国経済発展の史的研究——昭和44年度中間報告(その1)——」アジア経済研究所所内資料(調査研究部44-28) 1970年、第3論文(吉田昌夫編『アフリカI』アジア経済研究所 1991年(地域研究シリーズ第11巻) 134～144ページに抄録)。

(注10) 原口武彦『部族——その意味とコート・ジボワールの現実——』アジア経済研究所 1975年。

(注11) バウレ (Baule) 人、アキエ (Akie) 人は、いずれもコート・ジボワールに居住する部族の名称。

(注12) 滝川勉「東南アジア農業問題研究会の33年」『アジア経済』第47巻第2号 2006年 62～71ページ。

(注13) Polly Hill, *The Gold Coast Cocoa Farmer: A Preliminary Survey*, London: Oxford University Press, 1956; Polly Hill, *The Migrant Cocoa-Farmers of Southern Ghana: A Study in Rural Capitalism*, Cambridge: Cambridge University Press, 1963.

(注14) 「特集 1980年代アフリカ諸国の経済危機と発展の諸問題」『アジア経済』第27巻第5号 1986年。

(注15) 吉田昌夫編『80年代アフリカ諸国の経済危機と開発政策』アジア経済研究所 1987年。

(注16) World Bank, *Accelerated Development in Sub-Saharan Africa: An Agenda for Action*, Washington, D. C., 1981 (Coordinated by Elliot Berg).

(注17) 林晃史編『南アフリカ——アパルトヘイト体制の行方——』アジア経済研究所 1987年。

(注18) 吉田昌夫編『アフリカI』アジア経済研究所 1991年(地域研究シリーズ第11巻)。吉田昌夫編『アフリカII』アジア経済研究所 1992年(地域研究シリーズ第12巻)。

(注19) 三木亘「地域研究と世界認識——第二次大戦後日本における地域研究の思想——」アジア経済研究所(所内資料調査研究部 No.43-14。イスラム研究会 No.3) 1968年。

(注20) 林武「現代地域研究論」アジア経済研究所(所内資料調査研究部 No.43-48。イスラム研究会 No.5) 1969年。

(注21) 林晃史『南部アフリカ政治経済論』アジア経済研究所 1999年。

(注22) 島田周平『アフリカ 可能性を生きる農民——環境—国家—村の比較生態研究——』京都大学出版会 2007年。島田周平『現代アフリカの農村——変化を読む地域研究の試み——』古今書院 2007年。

年表1 アジア経済研究所のアフリ

昭和 /平成 西暦	37	38	39	40	41	42	43	44
	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969
研究会				アフリカ産業開発の諸条件 (藤田弘二)			アフリカ諸国における国民国家の形成 (星昭)	
							エネルギー資源の法的考察 (安藤勝美)	アフリカの総合研究 (星昭)
							ガーナ・ココア農家の経済分析 (細見真也)	
								アフリカ諸国における統計事情の研究 (阪田貞直・助川宏)
成果	『アフリカのナショナリズムの発展 (I)』 (宍戸寛)	『アフリカのナショナリズムの発展 (II)』 (宍戸寛)	『アフリカ経済の諸問題』 (藤田弘二)	『EEC・アフリカ新連合協定』 (荒木忠男)	『アフリカ諸国の経済開発』 (藤田弘二)	『アフリカの農業と農業政策』 (藤田弘二)	『東アフリカの貿易と流通組織 (III)』 (深沢八郎・岩城剛)	『アフリカ諸国における経済自立』 (星昭)
	『ニグロ・アフリカの伝統的社会構造 (I)』 (泉靖一)	『アフリカの指導者』 (宍戸寛)	『アフリカの経済開発』 (中村弘光)			『中央アフリカの社会・経済構造』 (星昭)		『ガーナ経済の歩み』 (細見真也)
		『アフリカの原料資源 (1913~1958)』 (ア・ユ・シュビルト著 アジア・アフリカ研究所訳)	『ブラック・アフリカの社会経済変容』 (泉靖一)	『アジア諸国の租税制度』 第5巻 アラブ連合・ナイジェリア・リベリア・クウェート (林大造)		『東アフリカの貿易と流通組織 (I)』 (岩城剛)		
		『アフリカの土地慣習法の構造』 (青山道夫、有地亨、依田精一)				『東アフリカの貿易と流通組織 (II)』 (深沢八郎)		
		『ブラック・アフリカの伝統的社会とその変容』 (泉靖一)	『北アフリカにおける石油開発』 (北アフリカ石油研究委員会)					
			『エチオピアの経済構造』 (末統吉間)					
海外		星昭 (ローデシア, 1963.3~1965.3)		吉田昌夫 (ウガンダ, 1963.12~1966.2)		林晃史 (ケニア, 1967.1~1969.1)		
	細見真也 (ガーナ, 1962.10~1964.10)		安藤勝美 (モロッコ, 1963.11~1965.10)		原口武彦 (チュニジア・コートジボワール, 1966.4~1968.3)		宮治一雄 (フランス・アルジェリア, 1966.4~1968.3)	

カ研究（研究会，成果，海外派遣）

45	46	47	48	49	50	51	52
1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977
アフリカの総合研究（II） （笹本武治，矢内原勝）		アフリカにおける経済 主体の形成（星昭）	アフリカの農業と土地保有制度（吉田昌夫）		アフリカの農民と食糧生産（細見真也）		仏語圏アフリカ諸国の 政変の典型的分析 （原口武彦）
	アフリカの鉄鋼業 （戸田弘元）		植民地支配とアフリカ 経済の変容 （山田秀雄）	戦後植民地支配の变化 とアフリカ経済 （山田秀雄）	南部アフリカの経済的 研究（林晃史）	南部アフリカの経済関係（林晃史）	
			イギリス南アフリカ特 許会社（星昭）	アルジェリアにおける 土地改革と都市・農村 関係の変化 （宮治一雄）	アルジェリアにおける 土地改革（宮治一雄）	ECとマグレブ諸国 （宮治一雄）	ECとマグレブ諸国の 経済関係（宮治一雄）
			コート・ジボワール諸族の形成と発展 （原口武彦）				

『南アフリカ経済論』 （D. H. ホートン著 林 晃史訳）	『アフリカ諸国にお ける経済自立（続）』 （アフリカ研究会）	『アフリカの鉄鋼業』 （戸田弘元）	『「アフリカナイゼー ション」の意味と現 実』（矢内原勝）		『アフリカ植民地にお ける資本と労働』 （山田秀雄）		『アフリカ植民地にお ける資本と労働（続）』 （山田秀雄）
『アフリカ特集』（特集 『アジア経済』2月号）	『アフリカの統計事情』 （助川宏）		『两大戦間の国際政治 とアジア・アフリカ』 （江口朴郎）		『アフリカの農業と土 地保有』（吉田昌夫）		『発展途上諸国の鉱業 法——その原則と事例 研究——』（安藤勝美）
	『アフリカ特集』（特集 『アジア経済』3月号）		『アフリカ植民地化と 土地労働問題』（星昭）		『部族——その意味と コート・ジボワールの 現実——』（原口武彦）		
星昭（西ドイツ，1970.3～1972.3）			中村弘光（ナイジェリア・イギリス， 1974.6～1976.6）				
1968.3～1970.6）							

特別連載

昭和 /平成 西暦	53 1978	54 1979	55 1980	56 1981	57 1982	58 1983	59 1984	60 1985
研究会	西アフリカにおける族的編成と国家形成 (原口武彦)		東アフリカ農村開発の比較研究——ケニアとタンザニア—— (犬飼一郎)		ロメ体制と西アフリカの経済統合 (中村弘光)		西アフリカにおける経済発展と英系企業 (細見眞也)	1980年代アフリカ諸国の経済危機と発展の諸問題 (原口武彦)
	1970年代における南部アフリカの政治・経済変動 (林見史)		西アフリカの総合研究 (細見眞也)			発展途上国直接借款推進基礎調査——ジンバブエ—— (山口博一)	コートジボワールの中企業 (原口武彦)	
	ECの地中海政策とマグレブ諸国の経済開発戦略 (宮治一雄)		南アフリカ共和国の工業化と人種差別をめぐる論争 (林見史)	フロントライン諸国の対南部アフリカ政策 (林見史)				
		アフリカの総合農村開発 (細見眞也)				中間技術の形成基盤と経済自立化 (吉田昌夫)		
成果	『アフリカの食糧問題と農民』 (細見眞也)	『ECとマグレブの経済関係』 (F. M. メッラーフ 著 宮治一雄 訳)		『70年代南部アフリカの政治・経済変動——南ア共和国・ローデシア・ナミビアを中心に——』 (小田英郎)	『南部アフリカ解放闘争とフロントライン諸国』 (特集『アジア経済』 9月号)	『フロントライン諸国と南部アフリカ解放』 (林見史)		『アビジャン日誌』 (原口武彦)
	『アルジェリアの石油開発協定——経済開発協定の事例研究——』 (安藤勝美)	『現代南部アフリカの経済構造』 (林見史)		『東アフリカの農村開発——ケニアとタンザニアの比較——』 (特集『アジア経済』 11/12月号)	『国際石油・鉱物資源開発協定の傾向と特徴——UNIDO資料翻訳と文献紹介——』 (安藤勝美・石田曉恵・矢谷通朗共訳)		<i>Agricultural Marketing Intervention in East Africa: A Study in the Colonial Origins of Marketing Policies, 1900-1965</i> (吉田昌夫)	
海外	島田周平 (ナイジェリア・イギリス, 1977.10~1979.10)	安藤勝美 (フランス, 1979.3~1981.3)		宮治一雄 (チュニジア, 1980.3~1982.10)		原口武彦 (コートジボワール, 1982.3~1984.3)		林見史 (イギリス, 1984.3~1986.3)
	豊田俊雄 (ケニア・イギリス, 1978.3~1980.3)	吉田昌夫 (タンザニア・スウェーデン, 1979.4~1981.4)				細見眞也 (イギリス, 1982.3~1984.3)		池野旬 (ケニア, 1982.3~1984.3)

61	62	63	1	2	3	4
1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992
1980年代アフリカ諸国の経済危機と開発政策 (吉田昌夫)	アフリカの地域協力と援助の役割 (林見史)	アフリカ諸国における農村社会の再編成 (林見史)	アフリカ諸国における都市社会の再編成 (吉田昌夫)	現代アフリカの国家形成と社会経済発展 (原口武彦)	転換期アフリカの政治経済 (原口武彦)	
南アフリカ変革の行方 (林見史)	アフリカ諸国の労働移動 (原口武彦)	アフリカ諸国の農工業における非アフリカ人生産活動の史的展開 (池野旬)		アフリカ諸国における商業的農業の発展 (児玉谷史朗)	ガーナにおける農業政策と土地制度 (細見真也)	
発展途上国構造改善のための円借款の効果的活用方策に関する調査——コート・ジボワール—— (原口武彦)	ガーナの近代化と教育政策 (細見真也)	アフリカ諸国の教育統計——ガーナの事例を中心として—— (細見真也)		南部アフリカ諸国の民主化の潮流 (林見史)		南部アフリカ諸国の民主化の課題 (II) (林見史)

「適正技術と経済開発——現代アフリカにおける課題——」 (吉田昌夫)

「80年代アフリカ諸国の経済危機と開発政策」 (吉田昌夫)

「アフリカ援助と地域自立」 (林見史)

「アフリカ農村社会の再編成」 (林見史)

「ケニアの教育——文献からのアプローチ——」 (丹埜靖子)

「アフリカ I」 (吉田昌夫)

「南部アフリカ諸国の民主化の潮流」 (特集「アジア経済」8月号)

「1980年代アフリカ諸国の経済危機と発展の諸問題」 (特集「アジア経済」5月号)

「南アフリカ——アバルトヘイト体制の行方——」 (林見史)

「アフリカ諸国の労働移動」 (特集「アジア経済」7/8月号)

「ウカンバニ——東部ケニアの小農経営——」 (池野旬)

「アフリカ植民地と非アフリカ人経済活動」 (特集「アジア経済」5月号)

「アフリカ諸国の国家形成と政治的民主化」 (特集「アジア経済」8月号)

「アフリカ II」 (吉田昌夫)

「アフリカ諸国における都市社会の再編成」 (特集「アジア経済」8月号)

児玉谷史朗 (ザンビア, 1986.3~1988.3)

原口武彦 (コートジボワール, 1988.3~1990.3)

池野旬 (タンザニア, 1990.3~1993.3)

丹埜靖子 (ケニア, 1987.3~1989.3)

宮治一雄 (モロッコ・アルジェリア, 1989.3~1991.3)

望月克哉 (ナイジェリア, 1988.3~1990.3)

特別連載

昭和 /平成 西暦	5	6	7	8	9	10	11	12
	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000
研究会	構造調整とアフリカ農業 (原口武彦)		民主化後の南部アフリカ (林見史)	南部アフリカ—民主化の課題— (林見史)	アフリカ農村変容とそのアクター (池野旬)	変貌するアフリカ農村—その現状と展望— (池野旬)	世界中のアフリカ—国際比較研究のための視座— (平野克己)	アフリカ比較研究の視座 (平野克己)
	冷戦終焉後の国際関係の変化とアフリカ (1) (林見史)	冷戦終焉後の国際社会と対アフリカ政策の変化 (林見史)	アフリカ諸国におけるインフォーマル・セクター (池野旬)	アフリカ諸国の複合的就業構造 (池野旬)	南アフリカ民主化の衝撃 (平野克己)	新生国家南アフリカをもたらす衝撃 (平野克己)	現代アフリカにおける国家、市場、農村社会 (高根務)	現代アフリカの政治経済変動と農村社会 (高根務)
	アフリカの食糧問題 (細見貞也)				90年代アフリカにおける政治変動とエスニシティー (武内進一)	現代アフリカの政治変動の内在的要因 (武内進一)	地域安定化の鍵握るナイジェリア新政権 (望月克哉)	
	アフリカの多民族国家と複数政党制 (原口武彦)	南アフリカ—民主化の行方— (林見史)						
成果	『アフリカにおける商業的農業の発展』 (児玉谷史朗)		『構造調整とアフリカ農業』 (原口武彦)	『冷戦後の国際社会とアフリカ』 (林見史)	『南部アフリカ民主化後の課題』 (林見史)	『アフリカのインフォーマル・セクター再考』 (池野旬・武内進一)	『南部アフリカ政治経済論』 (林見史)	『ガーナのココア生産農民—小農輸出作物生産の社会的側面—』 (高根務)
	『南部アフリカ諸国の民主化』 (林見史)			『部族と国家—その意味とコートジボワールの現実—』 (原口武彦)			『新生国家南アフリカの衝撃』 (平野克己)	『現代アフリカの紛争—歴史と主体—』 (武内進一)
	『転換期アフリカの政治経済』 (原口武彦)			『アフリカの食糧問題—ガーナ・ナイジェリア・タンザニアの事例—』 (細見貞也・島田周平・池野旬)			『アフリカ農村像の再検討』 (池野旬)	『ナイジェリア—第四共和制の行方—』 (望月克哉)
海外	平野克己 (南アフリカ, 1993.3~1995.3)		高根務 (ガーナ, 1995.3~1997.3)		児玉由佳 (エチオピア, 1997.3~1999.9)			
	武内進一 (コンゴ共和国, カボン 1992.10~1994.10)		津田みわ (ケニア, 1994.9~1996.9)					

(出所) 武内進一作成。

(注) 本表は、アジア経済研究所年報各年版などにもとづき作成した。1962~2008年に、どのようなアフリカ関連研究会が組で、完全な表にはなっていない。第1に、資料の制約から、1967年までにどのようなアフリカ関連研究会が実施されたアフリカ関連研究会・成果物は主たる対象がアフリカであるものに限定されており、アフリカについて一部で扱ったものしてきたが、それらは本表から漏れている。第3に、北アフリカ地域については、1970年代頃まではおおむねカバール・サレ業に含まれたことが影響している。第4に、研究成果として挙げられているものは、研究双書など書籍の形での出版物な制約があるが、アジ研のアフリカ関連研究会、研究成果、海外派遣に関する大まかな流れを掴むための資料としてご理

13	14	15	16	17	18	19	20	21
2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
アフリカ経済論の再構築 (平野克己)	新アフリカ経済論 (平野克己)	アフリカ経済実証分析の現状と可能性 (平野克己)		アフリカの個人支配再考 (佐藤章)		アフリカ農村における住民組織と市民社会 (児玉由佳)	中東・アフリカにおける紛争と国家形成 (佐藤章)	
開発途上国の農産物流通—アフリカとアジアの経験— (高根務)	アフリカとアジアの農産物流通 (高根務)	アフリカにおける「人間の安全保障」の射程 (望月克哉)	アフリカ紛争問題への人間中心アプローチ (望月克哉)	アフリカ諸国における外資企業の新展開 (平野克己)		アフリカにおける紛争後の課題 (武内進一)	アフリカ経済の構造変化とそのダイナミズム (平野克己)	経済成長下におけるアフリカ企業 (福西隆弘)
第三世界の紛争と国家 (武内進一)	第三世界の紛争—国際関係と国家形成— (武内進一)	アフリカ諸国の「民主化」再考 (津田みわ)	「民主化」とアフリカ諸国 (津田みわ)	グローバリゼーションと途上国農村経済主体の変容 (重富真一)		政治変動下の開発途上国の政党—地域横断的研究— (佐藤章)		
			転換期のエイズ政策—アフリカ開発への挑戦— (牧野久美子)		地域振興の制度構築 (西川芳昭・吉田栄一)		国際安全保障における地域メカニズムの新展開 (望月克哉)	
					マラウイの経済自由化と農村世帯 (高根務)	成長するアフリカ—日本と中国の視点— (武内進一)		
					途上国地域間競争にさらされるアフリカ地域産業 (吉田栄一)	アフリカ開発援助の新課題 (吉田栄一)		
<p><i>The Cocoa Farmers of Southern Ghana: Incentives, Institutions, and Change in Rural West Africa</i> (高根務)</p> <p>『アフリカ比較研究—諸学の挑戦—』(平野克己)</p> <p>『アフリカ政治経済変動と農村社会』(高根務)</p> <p>『アフリカとアジアの農産物流通』(高根務)</p> <p>『国家・暴力・政治—アジア・アフリカの紛争をめぐる—』(武内進一)</p> <p>『ガーナ—混乱と希望の国—』(高根務)</p> <p>望月克哉 (ナイジェリア・スウェーデン, 2000.9~2002.9)</p> <p>吉田栄一 (イギリス・ウガンダ, 2000.9~2002.9)</p> <p>佐藤章 (コートジボワール, 2001.6~2003.5)</p> <p>牧野久美子 (南アフリカ, 2001.8~2003.8)</p> <p>高根務 (マラウイ, 2004.5~2006.2)</p> <p>福西隆弘 (イギリス, 2004.9~2006.9)</p> <p>平野克己 (南アフリカ, 2004.10~2007.10)</p>								
		『アフリカ経済学宣言』(平野克己)		『アフリカ経済実証分析』(平野克己)	『人間の安全保障の射程—アフリカにおける課題—』(望月克哉)	『マラウイの小農—経済自由化とアフリカ農村—』(高根務)	『戦争と平和の間—紛争勃発後のアフリカと国際社会—』(武内進一)	『現代アフリカ農村と公共圏』(児玉由佳)
				『「民主化」とアフリカ諸国』(特集「アジア経済」11/12月号)		『アフリカに吹く中国の嵐、アジアの旋風—途上国間競争にさらされる地域産業—』(吉田栄一)		『地域の振興—制度構築の多様性と課題—』(西川芳昭・吉田栄一)
						『グローバル化と途上国の小農』(重富真一)	『アフリカ開発援助の新課題—アフリカ開発会議 TICADIVと北海道洞爺湖サミット—』(吉田栄一)	『アフリカレポート』休刊
						『統治者と国家—アフリカの個人支配再考—』(佐藤章)	『African Rural Livelihoods under Stress: Economic Liberalization and Smallholder Farmers in Malawi』(高根務)	

まれたか、どのような成果が出版されたか、そしてアフリカ関係研究者の誰がどこに赴任したかをまとめた。ただし、以下の点のか情報が得られなかった。座談会で語られているように、この時期にも研究会が開催されている。第2に、本表に記載されたは拾いきれていない。法律、経済協力、障害研究など、これまでアジ研の多様な研究プロジェクトでアフリカが研究対象となっているが、それ以降は入っていない（これには、1985年以降開始された総合研究事業において、北アフリカが中東総合研究事が中心で、最終成果物のみである。逆にいえば、内部資料や中間成果報告書はまったく記載されていない。このようになさきま解いただきたい。

お詫びと訂正

本誌第 51 卷第 6 号に下記の誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

記

箇所：43 ページ右段下から 1 行目

誤 衛藤審吉先生  
正 衛藤藩吉先生